

中國出土資料學會
2019年度第2回大会

日 時：2019年12月7日（土）
2019年度第2回大会
受付開始 12：30～
研究報告 13：00～17：00
総会 17：00～18：00

場 所： 東京大学 法文1号館315教室 （東京都文京区本郷7-3-1）
会場へのアクセス：■地下鉄丸ノ内線・大江戸線・・・本郷三丁目駅下車徒歩8分
■地下鉄南北線・・・東大前駅徒歩3分
■地下鉄千代田線・・・根津駅徒歩10分

報告Ⅰ 柏倉 優一（東京大学大学院人文社会系研究科博士後期課程）

発表題目：包山楚簡文書類に関する諸問題の検討

発表概要：本報告は包山楚簡文書類の中で現在に至るまで解釈の定まっていない諸点について、文書類を全体的・総合的に分析することで議論の決着を試みるものである。包山楚簡の文書類をめぐっては戦国中期の楚国の司法・行政・官制などを示す貴重な史料として多くの研究が行われてきた。しかし、文書類には釈読の困難な箇所が少なからず存在し、研究の障害となっている。また、先行研究の中には個々の記述を個別的に解釈したり、比較的解釈しやすい部分だけを取り上げて整然とした制度体系を復元しようとするために、文書類を全体的に見た時にその記述との間に矛盾の生じている見解が少なからず存在する。本報告では初めになぜ包山楚簡文書類が埋葬されたのかを検討することによって当時の楚国における文書類の位置づけを考察し、それを踏まえて包山楚簡文書類の総合的な分析を行うことで、未だ解釈の定まっていない諸点について報告者の見解を述べる。

報告Ⅱ 苗 壮（東京大学人文社会系研究科外国人研究員）

発表題目：古注本《蒼頡篇》考

発表概要：《蒼頡篇》は秦漢時期最重要的習字書。自上個世紀，居延漢簡、阜陽雙古堆漢簡、水泉子漢簡、北大簡等《蒼頡篇》簡本の先後發現，《蒼頡篇》的研究也日漸興盛。如果反觀《蒼頡篇》的訓詁學史，自西漢至於六朝時期，針對習字書《蒼頡篇》出現了諸如揚雄《蒼頡訓纂》、杜林《蒼頡訓詁》、張揖《三蒼注》、郭璞《三蒼注》等一系列訓詁著作。在這些訓詁著作中有一種就稱為《蒼頡篇》，即本文所稱的古注本《蒼頡篇》，它與《爾雅》並稱“蒼雅”，是南北朝至於隋唐之時最重要的訓詁書。本文通過對習字書《蒼頡篇》簡本以及散落於典籍中佚文的考察，推斷古注本《蒼頡篇》即隋唐書志中所稱杜林《蒼頡訓詁》二卷，並對該書的基本樣貌及其自西漢以來的形成史做出描述。

報告Ⅲ 蘇 建洲 (台湾彰化師範大学国文系教授)

發表題目：趨同還是立異？以安大簡《詩經》「是刈是穫」為討論的對象

發表概要：《詩·周南·葛覃》：「葛之覃兮，施于中谷，維葉莫莫。是刈是穫，為絺為紵，服之無斃。」

其中「是刈是穫」一句，安大簡《詩經》寫作「是𠄎是穫」，徐在國釋為「列」，讀為「刈」。安大簡《詩經》的整理者分析「𠄎」為从「禾」，从「刈」字繁體，應該是刈禾之「刈」的專字，並據此將楚簡中與「𠄎」有關的字形皆改釋為「刈」。本文認為「𠄎」與楚簡的「刈」字寫法不合，幾個楚簡例證改讀為「刈」文意也不妥貼。我們認為「𠄎」仍當釋為從「夕」的「𠄎」，讀為「穫」。今本「刈」與簡本的「穫」是同義換讀的現象。其次，「穫」舊說皆訓為「煮」，整理者認為「穫」應改釋為「穫」。我們認為根據簡文「專穫我△」的「穫」表示「污」，以及楚簡「穫」可讀為「穫」的用字現象來看，舊說仍是相當可信的。從這個例證可以檢討出土文獻與傳世文本對讀過程中所反映的「趨同」與「立異」的現象。

☆參加費（資料代）500円

☆非會員の来聴を歓迎します

連絡先（大会委員長）

〒270-8555

千葉県松戸市新松戸3-2-1

流通経済大学法学部

富田 美智江

Tel : 0297-60-1930 (直通)

E-mail :

tomita-michie@rku.ac.jp

